
密会は夜に[ゼノギアス]

須田 継

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

密会は夜に「ゼノギアス」

【Nコード】

N8883M

【作者名】

須田 継

【あらすじ】

ソラリス突入前夜。ジェサイアはシタンに呼び出されていた。

ゼノギアスのDisk1ネタバレです。クリアしてから読んで頂いた方がわかるかも。

設定自体はねつ造が入っていますので、ご注意ください。

(前書き)

ゼノギアスのファンフィクションです。

ソラリス突入後のネタばれが含まれます。そのため、クリア後に読む事をお勧めします。

また、設定にねつ造が含まれますので、ご注意ください。

説明不能なRPGのため、興味のある方は是非プレイしてください。Disk1だけは名作です。

月舟のゆく夜も更けた時刻　　男は足元の浮石のスイッチを操作した。

天空に浮かぶ樂園　　シエバト　　において、この浮石での移動は小さ過ぎる国土を有効に活用するために開発された代物だ。その中でも、彼の足下にある浮石は住人ですらどこに繋がっているのか分からない物だった。

短い銀髪をくしゃりと男がかき混ぜると、それと同じタイミングで浮石が動き出す。操作者ですらどこに向かうのか知らない浮石は、やがて男を一軒の家の屋根の部分へと導いた。

屋根が開き、浮石はそのまま家の中へと彼を導くと、家の中は比較的明るかった。すると、壮観なまでに傷の多い顔が浮かび上がる。ついた場所で、浮石からひよいと彼は降りる。背負っているライフルがガチャリと音をたてた。

「お待ちしてりました、先輩」

静かに男を待ち構えていたのは、黒い長髪をゆったりと肩のあたりでゆった眼鏡の男だった。黒い髪の男は眼鏡の中指で押し上げると、その黒い瞳を楽しげに細める。

先輩と呼ばれた男は嫌そうに顔をゆがめる。

「妙な場所を指定しやがって。誰の家だ？」

辺りを見回しながら、後輩らしき人物に彼が問う。

「メルキオール師の家ですよ」

シエバト三賢者の一人の名を、彼は楽しげにあげた。それに呆れたように銀髪の男はため息をついて髪を混ぜた。

「本人いねえのに、よく入れたな」

「フエイ達が勝手に鍵を開けちゃったみたいでしてね。だいぶ物色されてます」

「いいのか、弟子……」

「ま、今度本人に会う時にでも謝罪しておきましょう」

ケラケラと楽しげに笑う後輩に、もう一人は肩をすくめた。

銀髪の男はジェサイア・ブランシエ。シエバトと敵対している神聖ソラリス帝国のエリートだった人間だ。かつては地上制圧を目的とした軍である《ゲブラー》の総帥にまで上り詰めたほどの男である。しかし、彼はそれを辞退し、家族ともども地上へと逃げた。現在はジェシー・B・ブラックを名乗っているが、偽名である。

もう一人の黒髪の男はヒュウガ・リクドウ。かつてソラリスでジェサイア・ブランシエ、シグルド・ハーコート、カーラン・ラムサスと共にエレメンツと呼ばれたエリートの一人だった。敵国であるシエバトの三賢者の一人。ガスパールの孫娘であるユイと結ばれ、現在は地上に逃れてシタン・ウツキを名乗っている。

ジェサイアを椅子のある場所へとヒュウガは案内し、互いに椅子に座る。用意されたテーブルにあるグラスとビンに気づき、ジェサ

イアは訝しげに眼を細めた。

「何だ、それ」

「果実酒ですよ。ラハン村の人達に頂いたモノです。おいしいですよ」

話しながらヒュウガはジェサイアのグラスにそれを注ぐ。オレンジの甘い香りが部屋を満たしていった。

ふうん、と不思議そうにグラスを手に取り、ジェサイアは軽く口をつける。そして嘔きだした。

「ジュースじゃねえか！」

アルコール度数が一桁どころではない低さに、ジェサイアが激昂する。

「二日酔いで明日に障りがあっても困りますからね。我慢して下さい」

酒豪であるジェサイアを落ち着けるように手を振って、ヒュウガは苦笑した。そして、自身も同じもの注いだグラスを傾ける。

甘みのある果実酒だが、その酸味で飲みやすい代物だ。それでも、下戸であるシグルドには飲めまいと思い、ヒュウガは心の中だけで笑う。

限りなくオレンジジュースな果実酒を呆れたように見つめてから、ジェサイアはあきらめたようにそれを一気にあおった。普段の彼の飲む酒でそんな事をすれば、確実に理性のタガが外れるような飲み方だった。しかし、今彼が飲んでいる果実酒ではそんな事など全く起こらない。

テーブルにグラスを無造作に置き、ジェサイアはヒュウガを睨みつける。

「それで、オレを呼んだ意図は？」

本来であればすぐにでもソラリスへの侵入を敢行するはずだったのを、眼の前の男は言葉巧みに止めたのだ。「ちゃんと準備をしてから」だの「連れていくメンバーはちゃんと決めて下さい」だのパイのリーダーであるフェイに隣で吹き込む。

それがあからさまな誘導だと思っっているのはジェサイアのみであり、目の前の陰険メガネは「頭の良い優しい町医者」などというステレオタイプで他者を見事に欺いている。

「背中から撃ってもらうには、まずは私のこれからの行動についてお話ししておかないと撃ちにこれないかなあ、と」

ニコリと笑ってヒュウガはジェサイアの睨みからするりと逃れた。そして肩にかかった髪を少しいじり、ため息をつく。

「流石メルキオール師ですよ。ここにいと、どうやら私の情報はソラリスに漏れずに済むらしい」

「やはり、まだソラリスの側だったか」

舌打ちとともにジェサイアが目を伏せた。

予想はしていた。ジェサイアからすれば不自然すぎるソラリスから地上へ降りた理由。多くを語らない。まるで語れないと訴えるようにジェサイアを見る目。あれはヒュウガが誰かに話せば、そのままソラリスに伝わってしまう可能性ゆえ。

「覚えていますか？ シェバト戦役」

確認のようにヒュウガはジェサイアを見る。それに応じるようにジェサイアは静かにヒュウガを見た。

「忘れるか」

ソラリスとシェバトの全面戦争。八年前に起こったその戦争は、長く敵対していたシェバトをソラリスが潰そうと発生した戦いだっ

た。
その戦いにおいて、ヒュウガはソラリスの総司令官として指揮をとり、シェバトのガスパールと渡り合った。その戦いによりシェバトは疲弊し、ソラリスにたてつくだけの力を失う。

そして、ジェサイアはその頃シェバトの地上ゲリラ部隊に参加している。

血で血を洗う物量戦　その頃のヒュウガは冷血を絵に描いて額に張ったような軍人であり、ジェサイアが敵対した事にすら表面上は心を動かさないような人間だった。

ヒュウガは表情を動かさずに、うつむいてすり落ちたメガネを中指でぐいと押し上げる。

「でしょうね。私の役職はあの時と変わっていませんよ」

シェバト戦役時のヒュウガの役職は特務執行官　『守護天使』
と呼ばれる高位の幹部。

「オメエ！ やっぱり！」

テーブルを掴みながらジェサイアは思わず立ち上がった。それに気を止める様子もなくヒュウガは続ける。

「けれど、それはソラリスから情報を引き出すためです　　と言っ
たら信じますか？」

ニコリと笑いながら首を傾げてくるヒュウガに、ジェサイアは顔
をひきつらせた。

「そしてソラリスにはシエバトから情報を引き出すためにユイと結
婚した、ってか？」

「1」名答」

言いながらヒュウガは手に持った果实酒を少し飲む。

「ならば、オメエの意思はどちらなんだ」

恫喝するようにジェサイアが低い声で問うた。それに視線だけで
ジェサイアを見上げ、ヒュウガは笑った。

「それにはまず、何を持って『ソラリス』と定義するかによります
ね」

含む物を感じ、ジェサイアは表情を硬くしたままどかりと椅子に
腰かける。

「続ける」

顎で促すと、ヒュウガは謝意を示すように軽く目を伏せてから、
理知の光の宿る瞳でジェサイアを見た。

「『ソラリス』が天帝を頂点にガゼル法院、そして執政のカレルレンによって運用されているのはご存知ですね？」

「ああ」

「ゲブラーはカレルレンの下、教会はガゼル法院の下にあり、天帝はそれらを統べていることにはなっていますが実質的には何の力もありません。天帝の唯一の力は、その命令が絶対である　ただそれだけです」

寂しげに、呟くように語り、ヒュウガは区切るようにグラスを両手で握りなおした。

「では、私はどこの守護天使として配属したか」

それに弾かれたようにジェサイアが目を見開く。

本人に言われて、ジェサイアはようやく気付いたのだ。この目の前の人物は『本当は誰に従っているのか』を、全く疑問に思わなかった自分に。

グラスを口に持っていき、最後の一口をヒュウガはあおる。そして息をつくと、ヒュウガはゆっくりとグラスをテーブルに置いた。

「カールはゲブラー総帥でもある為、カレルレンの下。まあカレルレン自身も守護天使ではありませんが、彼は別格ですから。そして処刑人は法院の下」

「オメエは天帝の守護天使なのか」

「ええ。そのため、私は『ソラリス』の守護天使ではありませんが、天帝陛下の命令を最優先として行動して良い位置にいます」

それは、ソラリスにあつてかなり特殊な立ち位置である。

天帝の力は『何人も逆らえない存在』であると言う事だ。それは、ソラリスの民をまとめる為に必要とされ、本人もやむを得ずに座っている帝王の椅子。

天帝は大抵の場合、命令を出さない。ソラリスにおいて出される『天帝の命』はほとんどがカレルレンかガゼル法院のねつ造だ。

本当の天帝はただヒトの未来を憂う存在。それ故、実質的にヒュウガはかなり自由な場所にいると言える。

「さて、まずは私に課せられた命令をいくつか告白しましょう」

「そんなに命令されてるのか？」

呆れたように舌打ちしながら、ジェサイアは懐からタバコとライターを取り出した。

「まったく、酷いもんですよ。ですが、命令のいくつかは放棄するつもりですがね」

「いいのか？」

苦笑しながらさらっと酷い事を言うヒュウガに、ジェサイアは思わずタバコを落としそうになりながら睨む。

「良いんです。天帝陛下の命令じゃありませんから」

小首を傾げてから優雅に笑い、ヒュウガは椅子の背もたれに腕を引っ掛けた。

「無茶苦茶な線引きだな」

「無茶苦茶かどうかは話を聞いてから判断して下さい」

くつくつと笑ってから、ヒュウガは自分のグラスに果実酒を注ぐ。

「まず、法院からの命令ですが、アニムスのデータ転送とアニムスの肉体確保です」

「アニムス？」

聞き覚えのない単語にジェサイアが片眉を上げた。

「ギア・バーラーと同調率の高い者の事です。若君、ビリー君、そしてリコ。私もアニムスではありませんが、対象外です。もちろん先輩もアニムスではありませんが、指定された年齢よりも上なので対象から外されます」

「俺はまだしも、シグルドはリコより年下だろ」

あげられた名前を不審に思いながら、ジェサイアはタバコに火をつける。

かつてソラリスでエレメンツと呼ばれた面々は、ギア・バーラーとの同調率の高い者達だった。それを最年長で有り、生粋のソラリス人であるジェサイアが知らないはずはなかった。つまり、そのアニムスの中にはシグルドが確かにいるはずなのだ。

しかし、ヒュウガはゆるく首を横に振った。

「シグルドが同調できるのは若君と同じアニマと器。なので、この場合は同調率の高い若君が対象となります。それに、シグルドの体

を法院の方々が使いたがるとは思えませんからね」

「体を使う？」

口元にタバコを持って行きかけて、ジェサイアは動作を止めた。

「法院の方々はディアボロス以来、肉体が無いじゃないですか。代わりを捜索中なのですよ」

「まさか　！？」

ジェサイアは左手にあるタバコの箱をぐしゃりと握り潰す。それでも、ヒュウガは感情を映さない顔で淡々と語る。

「先輩の息子さんの体を使って、復活を目論んでいるわけですね」

「ヒュウガ！」

ジェサイアの左拳がテーブルを大きく鳴らす。テーブルの上にあったピンはがたがたと揺れ、グラスも同調するように抗議する。そこにきて、ようやくヒュウガは笑顔を見せた。

「ご安心を。この命令に従う気はありませんよ。ただ、『従うふり』はする必要がある」

「どついう事だ？」

幾分か冷静さを取り戻したジェサイアが、ヒュウガに問う。

確かに、ヒュウガがジェサイアにこの事を教える理由が、今のままではいまいだった。そのままの意味で有れば、ジェサイアはこ

の場でヒュウガを殺している可能性がある。それなのに、そんな心配はないと言わんばかりに、ヒュウガは丸腰だ。

いくらヒュウガが体術使いとして修業しなおしたとしても、彼はどこまでいっても剣士なのだ。それは、彼が剣士としての動作の延長としての体術しか使わない事が証明している。そういう意味で体術使いとしては、ヒュウガはフェイよりも劣っている。

このヒュウガが相手ならば、無傷とはいかなくてもジェサイアは勝ててしまう。なのに、この落ち着き方。

「体を使うつもりなら、法院の方々は若君やビリー君達の刻印リミッターを外す必要がある。刻印の力 先輩はよく分かっていると思いますか？」

「そういう事が」

ソラリスの刻印の力は、ヒト全てに影響する。力が強い者の存在が稀な事、そしてどうあがいても《天帝》に逆らえない事。この二つはヒトの遺伝子に組み込まれた刻印の力だ。

ソラリスがどんな国に対しても強いのは、この刻印を外せるのがソラリスのみであり、ソラリスが《天帝》の統べる国である為だ。

力の刻印は突然変異によって外れてしまう事がある。しかし、精神の刻印はソラリスで外す以外に外れていること等ほぼ無い。

だが、この精神の刻印は存在するだけでソラリスへの攻撃ができなくなってしまう恐ろしさがある。故に、ソラリスに敵対するならば外す必要がどうしてもあるのだ。

ようやく落ち着いたジェサイアは、安心しつつタバコの煙を肺に送る。そしてゆっくりと紫煙を吐き出した。

「けれど、従うふりをするとして、若君に演技をしてもらうのは不可能でしょう。騙し討ちみたいですが、秘密のままソラリスに行く

「しかないんですよ」

言いながら二人の脳裏に金髪に眼帯姿の海賊化してしまった王子が描かれる。良く言えば実直で情に溢れる王子様は、悪く言えば単純バカだった。

「確かに、あの小僧に演技は無理だろうな」

ガハハとジェサイアは豪快に笑う。

「ええ。まずはそれが命令の一つ」

ジェサイアの様子に苦笑をもらして、ヒュウガはグラスの果実酒を少し飲んだ。

「ここからが、私が全うしなければならない任務です」

区切って、ヒュウガはグラスの中身を全てあおる。再びジェサイアを見つめたヒュウガの表情は、先ほどまでとは違う色を宿していた。

「先輩、守護天使の役職を負ったままの私が、どうして地上にいると思います？」

謎かけのような問い。ジェサイアはタバコを吸いながら思考を巡らせる。

「アニメスの搜索 ではないだろうな。んな事、下っ端に任せられるはずだ」

「はい。アニメスの搜索はついでとして法院が出した命令です。私の本来の任務は、監視と見極め」

「監視だと？ 誰をだ」

「イドを」

「イド？ エメラダのいた遺跡でワイズマンと戦ったって言う？」

「赤いギアを駆る者 エルルの悪魔。七年前、エルルでカールを死の淵の寸前まで追い詰めた存在」

「ちよつと待て、オメエは今もイドを監視しているのか？」

違和感を感じて、ジェサイアがヒュウガの言葉に割って入った。それはまるで、イドがずっと傍にいるかのよう。

「ええ」

ヒュウガは簡単に肯定する。それに、ジェサイアは自分の手が汗ばむのを感じた。

「イドとは、誰だ？」

ヒュウガは少し視線を外すようにつつむく。するとヒュウガのメカネがライトを反射して光り、その奥の表情が見えなくなった。

「イドは、フェイの人格の一つです」

ジェサイアは、のどが詰まるのを感じる。

裏表のない、単純な性格のパーティーを引っ張る存在。王子であるバルトが背を預け、ジェサイアの息子であるビリーが信用を置き、ソラリスの少女 エレハイムと淡い恋心で結ばれた青年。その姿のどこに、あの破壊の権化と言い換えても良い存在の残滓を見られると言うのか。

「正確には、フェイガイドから作られた人格です」

正確をきすように、ヒュウガが静かに付け加える。

「監視の理由は？」

喉がかれるのを我慢しながら、ジェサイアは言葉を紡いだ。

「十二歳の少年が、カールをボロボロにできる　つまりは力の危険性が一つ」

握った掌の人差し指をあげ、ヒュウガが言う。

守護天使であるカール　カーラン・ラムサスを十二歳で殺しかける、それがどれだけ桁外れの戦闘能力かは、二人とも承知していた。

「そして、もう一つは彼が神の愛し子だから」

「神？」

突拍子もない単語に、流石にジェサイアも目を白黒させる。

「天帝陛下は神と呼んでいました。本来ヒトは時が来れば神へと帰ると」

あげた二本の指をヒトの足のように動かしながら、ヒュウガは思
い出すように目を伏せる。

「ヒトが神へと回帰するべきモノなのか、あるいはフェイが新たな
導き手となれるのか。ヒトを神へと回帰させる鍵は、天帝陛下が持
っているそうです。それを使うか、使わずに新たな進化を模索する
か。私はその見極めをしなければなりません」

「回帰とはどういう事だ？」

揺らぐ事無くすらすらと喋るヒュウガに、何とかジェサイアは言
葉を挟む。難解すぎる言葉のパレードは、本来であればジェサイア
の苦手とする分野だ。しかし、ヒュウガは目を伏せたままそのまま
の調子で言葉を紡ぐ。

「ヒトがヒトではなく、神の一部となる事。ある種の滅びと進化
ですね。そうなれば、私たち個々人が持つ意識は消滅するでしょう」

その言葉の尋常じゃない内容に、ジェサイアは立ち上がる。

「ヒュウガ！」

激昂とともに呼ばれた名前に、それでもヒュウガは目を伏せたま
ま続けた。

「これはヒトが誕生した刻ときより定められていた事。鍵を使えばヒト
は神へと回帰する。これを覆すことはできません」

「そうするよ」

唇を噛み、ジェサイアは空いた拳を握る。ヒュウガはゆっくり頷いた。

「ヒトがヒトのままであるには、フェイを導き手として育てる必要がある。けれど、彼が　イドがそれに反するのならば、私たちは回歸するより他にない」

ようやく目を開いたヒュウガは、ジェサイアを静かに見つめる。

「そして、その見極めをするのに、私はどうしてもイドと話をした。けれど、彼を目覚めさせるところらが殺されそうになってゆっくり話も出来ませんからね。そこで、ソラリスの拷問道具の出番なわけです」

「オメエ……」

「神経伝達をブロックする、例の装置があればそうそうイドも暴れられないはずですからね」

にこやかにヒュウガは笑いかける。

イドはともかく、フェイはヒュウガを全面的に信用している。それは傍から見ているジェサイアですら分かるほど。幼いひな鳥が親鳥について回るように、フェイはヒュウガに付いていくだろう。

それこそが、ヒュウガがフェイを大切にしていた唯一の理由なのだとしたら、それはジェサイアの中の良心を酷く苛んだ。ヒュウガ・リクドウと言う男は、どこまで酷い男なのだろうか。

「さて、以上が私の方の事情です。この事は今のところ先輩にしか話していません。ユイは　気付いているようですがね」

苦笑とともにヒュウガが言った。彼とは釣り合わないほどの良き妻は、何も語らぬ夫をそれでも支えている。

「シグルドには話さなくて良いのか？」

確認の為に問いながら、ジェサイアは自分のグラスに吸い殻を放り込んだ。それに頷きながら、ヒュウガはくつくつと笑う。

「シグルドは若君との関係が良好ですからね。情報が漏れても困りません。その点、先輩は性格に難はあっても息子さんと関係が悪いですから安心ですね」

「好き勝手に言いやがって」

洪面を作りながら冗談めかしてジェサイアは返した。この後輩は、冗談がどうしようもないほど下手糞である。

それに「すみませんねえ」などどうそぶきながら、ヒュウガは舌を出す。

「とにもかくにも、これからの予定についても話しておきましょうか」

「ああ」

頷いてジェサイアは先を促した。

「まず、ソラリスの外壁に着いたら二手に分かれます。私とフェイは第三層から入りますので、先輩は皆と一緒にソラリスに捕まっておいて下さい」

「おい」

我慢ならずにジエサイアはツッコミを入れる。それに「あははは」と笑いながら、ヒュウガは頭をかく。

「いや、捕まるのが一番手っ取り早いですから。処分されかねないマリアやハマーは私の方で手をまわしておきますし、先輩以外は殺されないでしょう」

「俺は殺されるの前提か!？」

「そうですね。先輩はシエバト戦役の時にやりすぎてますから、いくら私でも庇えませんがね」

大笑いしながら先輩をこきおろすヒュウガに、ジエサイアは渋面を作る。

「いけしゃあしゃあと。だが、この面で俺だとソラリスが分かるかあ?」

ニイと笑ってみせると、ヒュウガはきょとんとした顔のまま返す。

「あ、すみません。先輩の現在の顔についてはつつぬけです」

「ヒュウガっ!!」

どうにもならない怒りからジエサイアはヒュウガを殴ろうと立ちあがって腕を振った。しかし、やはり体術同士では勝負にならずに空振る。

「だって、来るとは思わなかったんですもん。仕方ないでしょう」

頭を抱えながら屈んで、ヒュウガが言い訳がましく言いつつ椅子から逃れた。

「そう言う訳で先輩は殺されちゃうかもしれない。だから、皆が捕まったのを確認したら一人で逃げて下さい。はい、これ偽造カード。私の副官のカードですので、顔見られないように使って下さいね」

ヒュウガはポケットから取り出した銀のカードをジェサイアに投げる。それを難なく片手で受け取りつつ、ジェサイアはそのカードの表裏を確認する。

ソラリスの紋章の刻まれたカードは、ジェサイアがいた頃の物とよく似ている。

「制限は？」

「士官クラスの部屋なら入れます。ただし、上級士官の部屋は避けて下さい」

「わかった」

頷き、ジェサイアはライフルを肩にかけ直して浮石に向かった。それを脇で見て、ヒュウガはあわててグラスとピンを片付けて後を追う。

狭い浮石に大人二人で乗りこみ、二人は夜空に放り込まれる。

この空の向こう 二人の故郷を破壊しに、二人は戻る。

そこには神の思惑など知らぬ、平和のゆりかごに在るだけの民草

とているというのに、二人はそれを破壊しに行く。そのゆりかごと保つために流された幾万の血を、これ以上流させぬ為に。

浮石が目的地に到着すると、ジェサイアはさっさと降りた。そんなジェサイアに、ヒユウガは「先輩」と呼びかける。それに半身だけで振り返ると、ヒユウガは笑った。

「明日。よろしく願いします」

頷き、ジェサイアは歩きだす。

二人は明日、世界を騙すのだ。

(後書き)

ここまで読んで頂きまして、まことにありがとうございます。

体調がすこぶる悪いのに、そういう時ほど無駄に打ち込んでしまいます。『花見酒』ほどじゃないですが、びっくりするほど長いですね。

ゼノシリーズは世界観が深くて非常に書きにくいのですが、シタン先生の話だけは色々書きたくなって仕方ありません。

あのしたたかな性格とか、回復が出来て最速で攻撃力がほぼ最強で「お前主人公か！」的な性能も好きです。

しかし、バベルの山登りと缶詰工場では「この緑色があッ！」と思わず叫びました（服が緑色だから。決して彼の娘のミドリちゃんではない）。

ジェサイアの「敵にまわるなら、俺は迷わずきさまを撃つぜ。たとえ背後からでも、な」から膨らませた話です。実際は、この台詞の間に一日挟んでないんですがね。

では、楽しんでいただけている事を祈りつつ。ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8883m/>

密会は夜に[ゼノギアス]

2010年10月21日23時44分発行